

## はじめに

SFにかぎらずサブジャンルの熱心な読者は、まだあまり人に知られていない作家や作品を追い求める傾向がある。欧米のスタンダードに対するオルタナティブとして、ロシア・ソ連のSFは長い間そのような役割を果たしてきた。現代文学の想像力的一端がSFと見分けがつかなくなり、南米やアジアの新しい「世界文学」が読者の選択肢を限りなく豊かにする現在、ロシアSFの存在は埋没の危機にあるようにも見える。しかしオルタナティブな文学の原点としてロシアSFの歴史を再読することは、豊饒な混沌という状況にある文学の更なる展望と可能性を読み解くことにつながるはずだ。幸いなことに、本書には帝政ロシア、ソ連、現代ロシアという様々な時期を対象としたSF論を収めることができた。もちろんそれらが扱うのは全体像の中の一部に過ぎないが、大ざっぱな見取図を提示することはできたであろう。

本書の冒頭を飾る久野論文は、ロシアで最初のSF作家と称されることの多いヴラジミール・オドエフスキーを論じている。オドエフスキーの生きた19世紀にはまだSFという概念は存在していなかったが、久野氏はジャンルの内在的な定義を丁寧に議論した上で、似たような作品を書いている同時代の作家との差異を明らかにすることにより、説得力をもってオドエフスキーをロシアSFの歴史に位置づけることに成功している。ロシアのSFは必ずしもサイエンスに基づかない「ファンタスティカ」と総称されることもあり、久野氏の定義ではブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』などの幻想文学の系譜が除かれてしまうという問題はある。しかしドストエフスキーの『おかしな男の夢』などの過去の様々な文学作品が「実はSFだった」という議論はすでに一定の飽和状態に達している。何かをSFだと断定するよりも前に、それが「どのようにして」SFと呼べるのかを考えることが、文学史を新しく整理するための創造的な鍵となるのではないだろうか。

越野論文は1980年代前半に流行した核戦争小説を比較分析している。米ソ間の緊張が高まり、「新冷戦」とも呼ばれたこの時代は世界各地で核戦争への不安が語られた。ソ連でも世代の異なる3人の作家が同じテーマで作品を書いており、その一人はSF作家ではないアダモヴィチだった。SFは時間や空間に限定されない可塑的で開かれたジャンルであるがゆえに、時代の具体的な状況を柔軟に反映し、自由な空想の出発点とすることができる。

宮風論文はボリス・ストルガツキイが後進のSF作家のために開催したセミナーを取り上げる。才能ある作家の多くが発表の場を与えられなかったソ連時代後期には、創作のためのセミナーが重要な意味を持っていた。たとえ広範な読者層に届くことはなくても、作家同士の親密な交わりの場において読み手からのフィードバックを得ることができたのである。単に作品を引き出しの中に書きためておくだけではない、サミズダートと並行するようなダイナミックな文学活動の在り方が提示されている。具体的な人々の交流の歴史の中にジャンルの形成の軸を読み取る宮風論文は、久野論文とは違った角度からSFを定義する可能性を与えるものだ。ソ連崩壊後の作品の発表が一見して自由になったかのように思われる時期において、あえて数千人の読者だけを相手に書くべきだというボリス・ストルガツキイの真摯な言葉は、SFジャンルだけに収まらない深みを持って響く。

久野論文がSFという概念がまだ存在しない時代にSF的作品の可能性を論じたのに対して、岩本論文はSFというジャンルが当たり前になった現代の文学を対象としている。ポストモダンの文学が先行するあらゆるテキストを自在に操るとするなら、トルスタヤやソローキンのようにSFの書き手とはみなされない作家がクローン人間やパラレルワールドといったSF的モチーフを使うようになったことは示唆的である。本書の刊行が遅れたために岩本論文は十年ほど前のロシア文学の状況を伝えるもの

になってしまったが、本論文が取り上げた『クィシ』、『青い脂』、『恐怖の兜』がその後陸続と日本語訳されたことを思えば、岩本氏の作品を選ぶ眼の確かさは疑いえない。

本書には4本の論考の他に、ロシアSF研究家である宮風氏作成の「現代ロシアSF人名事典」を収録することができた。これは作家だけではなくSFファンや編集者を含んだ野心的な試みであり、人物の相関関係というプロソポグラフィ的手法によってSFジャンルを規定しようとする宮風氏の研究の現時点での集大成となっている。本書の刊行の遅れにも関わらず、同氏による数度の改訂のおかげで最新の情報を伝えるものとなっている。

本書の構想は2005年12月17日に北海道大学スラブ研究センターで開催された研究会「ロシア・スラブSF幻想文学の世界地図」に基づいている。本来であれば研究会の後すみやかに刊行されるべきであったが、編者の怠慢のせいで報告書のかたちにまとまるのが大幅に遅くなってしまったことをお詫びしたい。最初の研究会は科学研究費基盤研究A「スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム」によって実施されたが、その後の研究の継続および成果発表にあたっては基盤研究B「社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究」、挑戦的萌芽研究「ロシア語文化圏の東西周縁の文学における戦争の語りの比較研究」を利用した。研究会の開催および本書の刊行において多くの方にお世話になったことを感謝したい。最後になるが、本書がSFに関心を持つ読者の想像力を刺激することがあれば、我々にとって大きな喜びである。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター  
越野剛